「こころ学」創生の取り組み

―― 連携研究プロジェクト紹介 ――

京都大学こころの未来研究センターでは、平成19年度～平成21年度にかけて、こころの“個”の側面にかかわる「こころとからだ」、“社会性”の側面にかかわる「こころときずな」、“精神性”の側面にかかわる「こころと生き方」という３領域を設定し、多彩な学際的研究プロジェクトを実施してきました。

これらの成果を受け、平成22年度から、こころの知の探究、実践と社会発信、研究者コミュニティの形成、若手研究者育成の４つの取り組みを軸とする、総合的な新学問領域である「こころ学」の創生を目指しています。

従来の３領域を基盤にしつつ、特に重点的に研究を進めるテーマとして「こころ観」「負の感情」「発達障害」「きずな形成」「現代の生き方」「自然とからだ」を設定し、脳科学、心理学、宗教学、倫理学、民俗学など異領域をつなぐ学際的な連携研究プロジェクトを推進しています。

連携研究プロジェクトは、こころの未来研究センターのスタッフが主導する「教員提案型連携研究プロジェクト」に加え、外部研究者が主導する「一般公募型連携研究プロジェクト」があります。

いずれにおいても、学内外の研究者、実践家と当センターのスタッフが密接にかかわり、学際的研究を進めています。

（平石　界）

「こころ学」の創生

＊研究プロジェクトは本誌第７号でも紹介しています。

研究プロジェクト一覧

教員提案型連携プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
負の感情	自己感情の制御と他者感情の認知の神経機構	船橋新太郎
	負の感情研究 ── 怨霊から嫉妬まで	鎌田東二
	甲状腺疾患における「感情のなさ」について	河合俊雄
	負の感情と生きがい観教育	カール・ベッカー
こころ観	こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究（人類はこころをどのようにとらえてきたか？）	鎌田東二
	こころとモノをつなぐワザの研究	鎌田東二
	メタ認知に関する行動学的および神経科学的研究	船橋新太郎
	現代における自己意識・他者意識の研究	河合俊雄
きずな形成	感情・認知機能におよぼす他者・モノの影響	吉川左紀子
	共感的対話の相互作用性	吉川左紀子
	信頼・愛着の形成とその成熟過程の比較認知研究	森崎礼子
	社会的ネットワークの機能と性質：「つなぐ」役割の検証	内田由紀子
現代の生き方	新人看護師のストレス予防とＳＯＣ改善調査	カール・ベッカー
	青年期の社会的適応：ひきこもり・ニートの文化心理学的検討	内田由紀子
	日米における糖尿病患者の心理・社会的側面と療養状況の関連	内田由紀子
	物への依存・人への依存	河合俊雄
自然とからだ	癒し空間の比較研究	鎌田東二
	進化と文化とこころ：生物的視点と社会的視点からこころを探る	平石　界
発達障害	発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
	発達障害と読み書き支援	吉川左紀子
教育	こころ学創生：教育プロジェクト	吉川左紀子
ブログ	こころの研究ニュースの発信：こころ学ブログ	平石　界

一般公募型連携プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
認知的文化差異の基盤に関する研究：調整型・影響型対人関係の役割	宮本百合（ウィスコンシン大学マディソン校）
利他主義の進化認知科学的基盤	小田　亮（名古屋工業大学大学院工学研究科）
こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究：食の「質」をふまえた食教育の検討	荒牧麻子（女子栄養大学栄養学部）
近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究	秋丸知貴（日本美術新聞社編集局長）
モノと感覚・価値に関する基盤研究	大西宏志（京都造形芸術大学芸術学部）
ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究──文化と医療誌における映像資料・精神生態関与資料をおもな対象として	宮坂敬造（慶應義塾大学文学部）
「社会的こころ」の多様性の進化的・遺伝的基盤に関する研究 ── 双子児法による	安藤寿康（慶應義塾大学文学部）

研究プロジェクト

自己感情の制御と他者感情の認知の神経機構

船橋新太郎（こころの未来研究センター教授）

■研究の背景

脳の働きとしてさまざまなものを挙げることができるが、人のこころの動きと最も密接に関連していると思われるのが、感情である。感情の制御や認知に関わる脳部位として、前頭連合野腹内側部が知られている。前頭連合野腹内側部は、扁桃体や帯状回から入力を受け、また、前頭連合野外側部とも緊密な機能的関係を持つことから、人の「こころ」の最も重要な部分である感情の表出や制御に関わる重要な脳部位である、と考えられている。この部位に損傷のあるヒトの研究により、乏しい感情表現、極端な感情の変化、自己感情の制御の欠如、共感や同情の欠如、社会性や倫理観の欠如などが報告されている。また、前頭連合野腹内側部は、自己の感情の表現や制御と同時に、他者の感情の認知にも関わることが知られている。他者の行為の目的や意味の理解に関わるシステムが運動前野や頭頂葉などの運動関連領域で発見され、このシステムはミラーシステムと呼ばれている。感情においても、感情の表現や制御に関わるミラーシステムが脳内に存在し、これにより他者の感情や感情の動きを認知することができると仮定すると、共感や同情などの神経基盤を説明できると考えられる。

■研究の目的

自己の感情を表現する仕組み、自己の感情を制御する仕組みを前頭連合野腹内側部で明らかにすると同時に、この仕組みが同時に他者の感情の理解にも貢献しているかどうかの検討を行う。感情の表現や制御に関わる前頭連合野腹内側部の神経システムの働きをもとに、「こころ」の表現としての感情の神経基盤を明らかにする。

■研究方法

自身の感情の変化や他者感情の理解においては、刺激として呈示した表情や体の動きの文脈依存的な変化が重要な要因となる。そこで、見ることによりさまざまな感情が生成される人を含まない30秒程度の動画と、さまざまな感情表現をしている人を含む30秒程度の動画を用意し、それを実験協力者に呈示して、人を含まない動画を見たときに惹起される感情（A）、人を含む動画を見たときに惹起される感情（B）、ならびに、その動画の中に現れた人の感情（C）を問う。感情Bと感情Cの間に関連があるかどうかを検討し、他者の行動によって推測したその人の感情と同じ感情が、その人の行動を見て自分にも惹起されることを確かめる。これにより、自己の感情を制御・表現する仕組みが、同時に他者の感情の理解にも貢献していることを確かめることができると考えられる。今年度は、研究目的にあった刺激の選択と作成に重点を置き、実施した。

■結果

BBC製作のビデオ“The Blue Planet”および“Planet Earth”の中から、動物のさまざまな行動場面、動物間の闘争場面、摂食場面、自然の風景、植物など、さまざまなシーンを約30秒の長さで560シーン取り出した。これらのシーンは、人が映っておらず、人を含まない動画を見たときに惹起される感情（感情A）の検討に用いる。一方、アメリカ映画７本、日本映画６本を任意に選択し、その中で人がさまざまな表現をしている場面を約30秒の長さで切り出し、200シーンを収集した。これらのシーンの多くには登場人物によるある種の感情表現がなされており、それを見たときに惹起される感情（感情B）や、登場人物のもつ感情（感情C）の検討が可能であると思われる。ただ、他者の感情理解にしろ、他者の行動により自己に生じる感情には、その前後の文脈の効果が強く反映されることが、シーンの選択にあたって痛感された。切り出した30秒のビデオ・クリップは、今までの多くの研究で使用されてきた静止画や写真に比べると、文脈効果を得られると思われるが、場面によっては登場人物の感情を理解するには短すぎることも考えられる。

次年度は、これらのビデオ・クリップを実験協力者が見たとき、どのような感情が惹起されるかを検討し、感情Aのビデオで明確にある感情が惹起されるシーンを感情ごとに数シーン集めると同時に、登場人物のあるビデオを用いて、感情Bと感情Cの相関の有無を検討する。

参考文献

Funahashi, S. (2011) Brain mechanisms of happiness. Psychologia, 54: 222-233.

研究プロジェクト

負の感情研究――怨霊から嫉妬まで

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■「負」の感情の制御

人間の「こころ」のはたらきの中で、特に微妙でやっかいな影響を及ぼすのが、「負」の感情である。

「負」の感情には、怒り、憎しみ、恨み、嫉みなどさまざまあるが、正義感に駆られた怒りを抱くとか、理不尽な振る舞いを憎むとかの感情であるならば、その怒りや憎しみは「負」というよりも、関係性をより良い方向へと是正していく「正」の側面を持つことになるので、その場合、「正」と「負」の関係は一義的・実体的に決定しているとはもちろん言えず、関係的・状況的な相互反転性や両義性を持っている。

とはいえ、これらの感情が「負」となることがあるのは、それらの感情の強い生起が、自己のあり方や他者との関係性に修復困難なダメージを与えたり、暴力的な破壊をもたらすことがあるからである。誰しも一度ならず体験したことがあると思うが、破壊衝動を伴うこともあるこうした「負」の感情をコントロールすることは容易ではない。

わたしが「負」の感情研究を始めたのは、「世直し」に対置して「心直し」ということを考えるようになってきたからであるが、その「心直し」において「負の感情の制御」という問題はきわめて重要な課題となってくると思えたからである。

■ 2 つの合同研究会

そこで、本研究プロジェクトでは、本年度は、慶應義塾大学との合同研究会として、１つは、お盆の行事と大文字（五山）の送り火の行われる2010年８月15日と16日に「『負の感情』とはなにか？――『底つき感』の通文化比較とその手法としての映像」というテーマで、もう１つは、2011年２月21日に「『負の感情』の克服への方途――心理学、宗教学、人類学による東西の文化比較から」というテーマで行った。

前者では、南カリフォルニア大学教授の文化人類学者・映像人類学者のK. G. Heider氏が「ニューギニアおよびインドネシア先住民社会における負の感情と映像人類学」について発表し、それを中心に負の感情の文化的ありかたの共通性と違いについて映像資料も交えつつ検討した。後者では、トロント大学教授の認知心理学者のGerald Cupchik氏が“Under the Gaze of the Buddha: Calming Our Negative Emotions.”と題するプレゼンテーションを行い、これを中心に「負の感情」の克服への方途の文化的共通性と違いについて、トリックスター論や宗教的方途の異同にも焦点を合わせつつ東西文化の比較という視点から論議した。特に、負の感情の克服に例えばトリックスターの笑いが有効に作用する文化的文脈や、仏像の表情の認知と感情の問題、またユダヤ教と神道における〈畏敬〉の感情の比較、負の感情の鎮め方などが議論された。

■「負」の感情の克服に芸術が果たす役割

本研究プロジェクト「負の感情研究」は、副題に「怨霊から嫉妬まで」という副題を付している。それは、中央アフリカのピグミー系狩猟採集民および中央アジアの遊牧民を対象に、これまで「嫉妬」と呪術ないし宗教実践の関係についての報告がほとんどない狩猟採集や遊牧社会における「嫉妬」のあり方について、現代日本を含むより「複雑な」社会体制における「嫉妬」のあり方との比較を念頭に実証的に再検討することを研究計画の1つに据え、これにより得られた仮説を、農耕以後の北東アジアの諸社会における社会怨霊、祟り、怨念、復讐などの歴史民俗事例に関する文献記述を批判的に見直し、再解釈を行おうと考えたからである。

■和歌、神道祭祀、仏教儀礼、修行

そして、これらのフィールド研究や文献研究で得られた視角や考察を、文学・音楽・演劇・舞踊などに表象されてきた「負」の感情表現に応用して、「負」の感情の克服に芸術が通時代的に果たしてきた役割を解明することを企図した。そこにおいて、とりわけ、「鎮魂の芸能」と言われる能（申楽）の取り扱いは本質的に重要な事例研究となる。

そこで、本年度は能研究を核としつつ、「怨霊」の荒ぶる都／「嫉妬」の渦巻く都・平安京の「負の感情」を浄化する装置・方途・技法としての和歌と神道祭祀と仏教儀礼と修行を考察の対象としていった。具体的には、桓武天皇の実弟・早良親王の「怨霊」鎮めとしての「御霊神社・出雲寺」の創建、菅原道真の「怨霊」鎮めとしての「北野天満宮（北野天神）」の創建、崇徳上皇の「怨霊」鎮めとしての「白峰神宮」の創建、東：青龍、南：朱雀、西：白虎、北：玄武の四つの霊獣に護られた風水都市（四神相応の地）平安京、鬼門の鎮めとしての比叡山延暦寺と赤山禅院、仏教における負の感情の解消方法＝煩悩の消滅＝解脱プログラム＝四諦八正道を検討考察しつつ、それが聖徳太子が策定したとされる「憲法十七条」にどのように反映されているか、などの諸問題について考察を進めつつある。

関連文献

鎌田東二編『平安京のコスモロジー――千年持続首都の秘密』創元社、2010年。

研究プロジェクト

甲状腺疾患における「感情のなさ」について

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■プロジェクトの目的

甲状腺疾患は、古くから心身症の１つとして挙げられ、心理的問題とも関連の深い疾患であると考えられている。本プロジェクトは甲状腺疾患専門病院における心理療法の実践に端を発するもので、これまでに事例検討・調査研究が重ねられるなかで、反省的な感情が生じてきにくいなどの特徴が指摘されている。

こうした指摘をふまえて、本プロジェクトは、２つの心理検査とインタビューから甲状腺疾患患者の心理的特徴を多角的に把握しようとするものである。また、心理的問題から来談に至ることの多い神経症と比較することで、甲状腺疾患の特徴を捉えようと試みた。

■調査の対象者

下の表１のとおりである。

■心理テストによる検討①　NEO-FFI人格検査

神経症傾向・外向性・開放性・協調性・誠実性の５つの因子からなるNEO-FFI人格検査においては、各甲状腺疾患群（GD, HD, NG）は５次元ともほぼ標準域にあった一方、神経症群NEは神経症傾向が高く、外向性・誠実性が低かった。自己評定型の質問紙では、神経症の特徴は明らかになったが、甲状腺疾患の特徴は捉えられなかった。

■心理テストによる検討②　バウムテスト

「実のなる木を一本」描くバウムテストは、人格構造を捉えようとする投影法である。

慢性甲状腺炎HD群と結節性甲状腺腫NG群は、樹幹がなかったり、幹や枝先が閉じられていなかったりする木が統計的に有意に描かれることから、内と外のつながりや境界が不明瞭で、自我境界の弱さが示唆された。バセドウ病GD群は、樹冠が描かれるけれども閉じきれなさが目立ち、甲状腺疾患のなかでは神経症水準に近いが、神経症NE群よりも自他の境界に曖昧なところがあり、他者との間で葛藤を感じにくいと考えられた。

意識的レベルで回答される質問紙では、甲状腺疾患群は標準的な反応を示すにもかかわらず、バウムテストでは神経症水準よりも重い特徴が見られた。甲状腺疾患群（GD, HD, NG）では、深い問題を抱えていてもそれを捉えて対処する自我が弱く、心理的問題として意識されていないのではないかと考えられた。

■インタビューによる検討

半構造化面接から、身体症状と心理的問題の関連、自分のことをどのように捉えているか、他者との関係、カウンセリングへの関心などが検討された。

統計的な分析に基づく各疾患群の特徴は、表２のようにまとめられた。

神経症NE群と比較して、甲状腺疾患群は主体の意識に乏しく、問題を内的に抱えて扱いにくいと考えられた。

また、受動的ながらカウンセリングに関心を示す者も約29％いたが、実際に来談に至ることは非常に少なかった。甲状腺疾患においても、心理的な援助の必要性や可能性が考えられるが、彼らがカウンセリングへ至るまではかなりの距離があると考えられる。甲状腺疾患患者の問題の捉え方、訴え方、またカウンセリングへのニーズに対応した導入が必要だろう。

表１　調査対象者

疾患群	バセドウ病（GD）	慢性甲状腺炎（HD）	結節性甲状腺腫（NG）	神経症（NE）
疾患の主徴	甲状腺ホルモンが過剰になる。甲状腺の機能亢進。	甲状腺ホルモンが不足する。甲状腺の機能低下。	甲状腺にしこり（結節）ができる。甲状腺の機能に影響なし。	精神科クリニックにて精神科医に神経症圏と診断された者。
人数（M, F）	64（12, 52）	38（3, 35）	68（11, 57）	22（6, 16）
平均年齢（SD）	36.9（10.56）	46.6（12.06）	51.0（11.87）	38.8（14.24）

表２　半構造化面接の結果

GD	• 症状の自覚があり、３群のなかでは比較的心理的次元と身体的次元が近い。 • 問題を感じていたとしても、それを自己のものとして捉えにくく、自覚がありながら自発的に治療を求めることが少ない。 • 関係のなかに拠り所を求めているようだが、その関係のあり方が具体的・行動的レベルで表されやすい。
HD	• 周囲に合わせることで、円滑な人間関係を保とうとする傾向があり、自己概念にもネガティブなものを捉えにくい。
NG	• 感情に言及されることが少ない。内面に着目しにくく、外的な特徴から自分を捉える。文脈や状況に沿わない語りが展開されるなど、何かを捉える視点が希薄で、対象を内省してそこに留まることが少ない。

研究プロジェクト

負の感情と生きがい観教育

カール・ベッカー（こころの未来研究センター教授）

■イメージや宗教に偏らない「瞑想」の応用

ストレスは、誰にとっても非常に大きな課題であるが、教職員や看護師のストレスは、並々ならぬレベルに上る。彼らは毎日、さまざまな性格の生徒や患者を相手にし、自己中心的で理不尽な要求を押し付けてくる、言わば「モンスターペアレント」や「モンスター患者・家族」に対しても、笑顔でご機嫌を取らねばならず、これまでにはなかった事態にまで及んできている。さらに教師は、学力のみならず、子どもの集中力やしつけ、人間関係の在り方まで育てねばならなくなってしまい、看護師は看護のみならず、無数の事務処理や事務報告を要求されてしまっている状況である。その結果、学校の教諭が「勤務拒否」まで起こしているケースが目立ち、また若手の看護師の燃え尽きや離職率は社会問題にまでなっている。これらの問題に対して、こころの未来研究センターのプロジェクトの１つとして、京都の伝統に基づく「ストレス軽減法」、即ちイメージや宗教に偏らない「瞑想」の応用を考えて提唱している。

皮肉なことに、瞑想の身体的・精神的効果に関する研究は、それを昔から実践してきた東洋ではなく、むしろ欧米のほうで近年、医学的に研究され始めている。大人の抱えるストレスや、それに基づく疾患を軽減するという証明も現れつつあり、例えば「不可逆」と思われた動脈硬化や心臓病でさえ、瞑想によって緩和できるという目覚ましい報告もある。また、子どものADHDや集中力不足が嘆かれている教室への導入により、子どもがそれまでにないほどの落ち着き、集中力、記憶力を増してくる、との報告もある。ただし、日本では、その試みは皆無に近い。

■「わく・湧く・ワークショップ」

私たちは当センターで、日常ストレスを感じている、あるいはストレス問題に興味を持つ教職員や看護師を招き、「わく・湧く・ワークショップ」という公開講座を行っている。このワークショップは、イメージ・呼吸・精神統一とストレス関連疾患などとの関係を研究している院生たちの力を借りて、ほぼ２か月に１度のサイクルで開催している。仕事帰りの夕方６時から８時頃まで、瞑想の文化的背景やその理論といった簡単なプレゼンテーションの後に、メディテーションとイメージワーク（呼吸法やイメージ・トレーニング）などのリラクセーションやストレス低減法を実践している。

終わってから参加者に感想を尋ねるのみならず、心理的・生理的尺度で実践前後の感情やイメージ、ストレス値の変化を測定している。特にストレス値の測定では、市販の唾液アミラーゼモニターを使用して、唾液中のストレスホルモンのαアミラーゼを測定している。これは参加者からも好評で、「ストレスが数値化されることに興味を持った」という感想が寄せられている。

現時点では有意なレベルのデータは得られていないが、これらの測定で参加者がストレス管理への認識を深めるとともに、ストレス低減法として瞑想を活用していくことに期待している。

■国際シンポジウム「東洋のこころでストレス過多社会を生き抜く」

当センターには、瞑想のような意識トレーニングに造詣の深い諸氏が集まっていた。飛騨高山の千光寺住職、大下大圓師は袈裟掛けで国公立病院に出入りし、末期患者や妊婦の精神支援を行っている。スリランカで修業を重ね、最近では『ケアと対人援助に活かす瞑想療法』、『癒し癒されるスピリチュアルケア』を著している。また、フィリピンのカトリック系大学で初めて瞑想やヨーガを導入した精神科医のダンテ・シンブラン教授も、2010年８月から４カ月間、当センターの客員研究員として在籍していた。この両名と、香港から２人の瞑想の大家を講師に招き、11月28～29日の両日、「東洋のこころでストレス過多社会を生き抜く」と題した国際シンポジウムを開催した。紅葉狩たけなわの週末であったが、両日で参加者は130人を超える盛況ぶりであった。このことからも、社会におけるストレス問題への関心の高さが窺える。

国際シンポジウムの発表でも、瞑想によって、心臓や肺の機能が調整され、高血圧や不整脈に対しても有益であることが指摘された。瞑想で喘息や慢性痛、不眠症等も緩和され、脳内のセロトニンやドーパミン、メラトニンなどが増え、免疫力機能も上昇したという報告もある。またトレメラーゼの上昇から、長寿につながることを期待する研究者もいるという。こころの未来研究センターでは、これらの先行研究に基づき、人間の「こころ」を理解しようという学術的な目的に止まらず、実際に慢性的なストレスや疼痛で困っている学校や病院の職員への導入に関して、国内外の前例などを参考にしつつ、これから積極的に研究と応用を進めていこうとしている。

研究プロジェクト

こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究
（人類はこころをどのようにとらえてきたか?）

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■こころ観の日本思想史

人類が「こころ」をどのようにとらえてきたかを、「こころ観」という括り方で捉えることから本研究プロジェクトは出発した。宗教も哲学思想も科学も、それぞれの「手法」で「こころ」を捉え、それがどのようなものであるのかを「解釈」したり「説明」したりしている。その「解釈」や「説明」のモードやコードを、「思想史」や「文化論」として位置づけてみるというのが本プロジェクトのめざすものである。だからここでは、宗教も哲学思想も科学も特別扱いはしない。そのいずれもが、独自の手付きや手法で「こころ」にアプローチしていると考えるからだ。

こうして、さまざまな観点からの多様なアプローチを可能な限り総覧しつつ、「こころ」観の多様性を浮き彫りにしながら、その多様性の中の共通原理に迫っていきたいと思っているが、とりあえず、戦略的にも戦力的にも基軸となるのが、「こころ観の日本思想史」というテーマである。この基軸を縦軸にとって、そこから東アジアや諸地域・諸時代の「こころ観」を横軸に、それらとの比較や照合を行っていく。

■こころ観に関する論文

各論的には、すでに、縄文遺跡から見る縄文人のこころ観（たとえば、死と再生、生まれ変わりの観念など）、『古事記』や『日本書紀』『風土記』『古語拾遺』などの神話や古代神道儀礼から見る日本人のこころ観については、論文（「こころの練り方」探究事始めその一、など）や著作（『神と仏の出逢う国』『平安京のコスモロジー』など）にまとめてきている。

また、仏教から見るこころ観についても、仏教瞑想とスピリチュアルケア学専攻の井上ウィマラ氏がこころ観とワザ学との相関関係の中で瞑想との関係において論じた（「仏教瞑想の射程とマインドフルネスの応用可能性」）。また、旧約聖書学専攻の手島勲矢氏が「ユダヤ教聖書解釈における〈心〉と〈名前〉と〈顔〉」について、教育人間学専攻の矢野智司氏が「人間の心を生かす他者としての動物――文学作品を通しての動物―人間学のレッスン」について発表し、その要点を表題と論点を少し変えて『こころの未来』第６号に論考として公開している。また、美術史専攻の土田真紀氏が「柳宗悦と民藝におけるワザとこころ」、記録映画『久高オデッセイ』の監督・大重潤一郎氏が「久高島に伝わる海の民のワザとこころ」について発表し、その内容を井上論文とともに『モノ学・感覚価値研究』第５号に掲載した。

■「こころ観」研究を通して浮かび上がった問題

以上のような本年度の「こころ観」研究を通して、問題として浮かび上がったことは、第一に、「心」や「魂」と「息（呼吸）」との関係である。前掲手島氏が論じているように、古代ヘブライ語の「ネフェシュ」も「プシュケー」も語源的に「息」の意味を持っている。これを図式化していえば、「いのち」と「いき」と「こころ」と「たましい」は、多くの古代宗教文化において密接な相関関係を示しているといえる。息が吹き込まれて命という肉体的実体性を持ち、そこに心の働きが生まれ、その心を包含しつつ核ないし内奥に存在するのが魂であるという相関である。

第二に、仏教はそのような「こころ」を呼吸法をベースとした瞑想技法によって探究し制御しようとした。こころのモニタリングやスキャニングを精緻にメタ化した身心変容技法が仏教文化には芳醇に保持されている。そこで、仏教の研究は「こころ観」研究においても極めて重要な柱となるだろう。

第三に、各論として、矢野氏が提示した「動物」と「人間」との関係の「物語」も、大変示唆に富む視点を提供してくれる。人間がどのように自己理解を進めていったかを考える際に、「動物」という他者理解をどう進め、その相関をどう「物語」ったかは、アニミズム・シャーマニズム・トーテミズムなどの原初宗教とも絡み、また古代からの神話や儀礼や諸種の昔話とも絡んで、人間理解、ひいては人間の「こころ」理解（こころ観）の形成を測るものさしとなるだろう。

第四に、そのような「こころ観」理解の「物語」と「ワザ」の１つとして、柳宗悦の「民藝」運動や沖縄・久高島の民俗儀礼のコスモロジーと諸技法を見ていくことが可能であろう。

関連文献

手島勲矢「名前を付けること ―― 心理学と聖書解釈」『こころの未来』第６号、2011年３月。
矢野智司「人間の心を生かす他者としての動物」『こころの未来』第６号、2011年３月。
土田真紀「柳宗悦におけるワザと自然」、大重潤一郎「久高島に伝わる海の民のワザとこころ」、井上ウィマラ「仏教瞑想の射程とマインドフルネスの応用可能性」、鎌田東二「『こころの練り方』探究事始めその一」（以上、『モノ学・感覚価値研究』第５号、2011年３月）。
鎌田東二『神と仏の出逢う国』角川選書、角川学芸出版、2009年。
鎌田東二編『平安京のコスモロジー ―― 千年持続首都の秘密』創元社、2010年。

研究プロジェクト

こころとモノをつなぐワザの研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■「負」の感情の制御

「心」と「物」を二元対立的に捉えるのはデカルト以来の近現代の常識化した１つの見方であるが、その見方の是非は差し置くとしても、通常、「物」は目に見えるが、「心」は目に見えないものと考えられている。

だが、ここで、「ワザ」という第三項を置いてみると、対立的に見える両者に橋が架かる。

例えば、こころの未来研究センターのある稲盛財団記念館の西側を流れる鴨川に「橋」を架けたいという「思い・イメージ・プラン」を思いついたとする。そのような「思い」を持つのは「心」のはたらきであり、ある動機や意図や感情や思考に基づいて起こる想像力の発露でもあるが、そのイメージを具体化するために、設計技師を集め、図面を引いたり、力学的に橋桁の太さや強度を計算したり、施工の手順や予算を検討したりして、財源を確認し、建築土木業者に発注して、何年かかけて第二荒神橋を作ることになる。

とすれば、わたしたちはさまざまな「ワザ」（土木建築などの諸技術も含む）を通して、「物」の世界に改変を加え、環境世界や人間世界に大きな変化をもたらしてきたということになる。つまり、広い意味での、人間が用いる「ワザ」こそが、目に見えない心と目に見える物をつなぎ、それらを具体的に表現したり改変したりするソフトウェアであるということになるだろう。

■ワザはこころとモノとをつなぐ媒介者

本研究プロジェクトでは、あえて、古代日本語に発する「ワザ」という言葉を使いながら研究を進めている。古代日本では神霊を呼び出し、交わり、生命力を高め強化する技法を「ワザヲギ」と呼んだ。例えば、『日本書紀』では、「俳優」という漢字を「ワザヲギ」と訓む場合もあれば、「ワザビト」と訓む場合もあり、さらには「伎人」「俳人」「倡人」も「ワザビト」と訓んでいる。いずれにせよ、それらは神楽や舞踊などの古代宗教儀礼に関わる聖なる技法であった。

その「ワザ」は、上記のような諸種の儀礼や芸能から、さまざまな芸術・技術・学芸・ライフスタイルをも包含する。人間はこの「ワザ」の力によって、多様で豊かな文化や文明を形成し、生の充実や社会発展をはかろうとしてきたのである。

こうして、本研究プロジェクトでは、「こころ」に迫る観点として「ワザ」に注目した。「ワザ（技・業・術）」とは、人間が編み出し、伝承し、改変を加えてきたさまざまな技法であり、その技法には、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かな種類がある。このような「ワザ」に着目することにより、人間の心と、人間が作り上げてきた物や道具や観念世界などとの相互関係を具体的に吟味できる。〈ワザはこころとモノとをつなぐ媒介者〉であるというのが、本プロジェクトの基本的視座である。

■「手ワザ」領域と「体ワザ」領域

このように、「ワザ」が心と物に相関するソフトウェアであるために、ワザ学研究はこころ観研究やモノ学研究と切り離すことができず、本年度は特にこころ観やモノ学との合同研究会を行った。こころ観の研究プロジェクト報告でも書いた土田真紀氏、大重潤一郎氏などの研究発表はまさに心と「ワザ」の相関に関わる具体事例の発表であった。また、染色家である人間国宝の志村ふくみ氏による「現代の『工芸』の道」は、柳宗悦が提唱した「民藝」運動から作家として独自の「ワザ」を編み出し、活躍していく過程を率直に表現して大変参考になる。そこに、「民藝」という、「モダン（近代）」を挟み撃ちする志向性を持つプレモダン（前近代）からポストモダン（後近代）を包摂する運動が孕んでいる、もの観・こころ観・わざ観が浮上してくるからである。

「ワザ」は「こころ」と同様に、古語に発し、現在も多様に用いられている広がりと多義性を持つ言葉である。柔道では「ワザアリ」という語がそのまま国際判定語になっているが、世界共通語としての「ワザ」の世界を探求し、「ワザ」の本質と意味、またそのヴァリエーション（諸相）を研究することによって、こころと生の豊かさと面白さや楽しさを捉え、それぞれの生活実践に生かし応用することができる。そしてそれが個性と自由を担保したこころ直しと世直しにつながってゆくという志向性のもとで本研究を、まずはモノづくりに関係するような「手ワザ」領域（展覧会「物気色展 ── 物からモノへ」2010年11月21～28日）と、神楽や芸能や呼吸法や瞑想などを含む身心変容技法・ボディワークである「体ワザ」の２つの領域を中心に進めつつある。

関連文献

大石高典「身をほぐし、心をほぐす技術と平和力 ── 出産・武術・狩猟を貫く『生存のためのワザ』を構想する」『モノ学・感覚価値研究』第５号、2011年３月。
奥井遼「憑依と演技の間に ── 淡路人形座における人形遣いの身体論序説」同上。
海野直宏「新体道のワザと滝行」同上。
鎌田東二「滝行 ── その日本的身体技法の形成と特色についての一考察」同上。

研究プロジェクト

メタ認知に関する行動学的および神経科学的研究

船橋新太郎（こころの未来研究センター教授）

■研究の背景

私たちは、今何をしようとしているのか、何を知っていて何を知らないのか、何が得意で何が不得意か、今何を考えているのかなど、今の自分の「こころ」の状態を知ることができる。自分自身のこころの状態をモニターする働きや、自身が記憶している内容やそれを思い出せるかどうかなど、こころの状態をモニターする働きを総称して「メタ認知」と呼んでいる。こころの状態やこころの働きの検討は言語による内観報告以外に有効な方法がないことから、メタ認知の研究は言語によるコミュニケーションが可能な人でのみ実施できると考えられてきた。

メタ認知の研究では、feeling-of-knowing（FOK）判断課題がよく用いられる。この課題では、実験協力者に一般的な知識を問うテストを課す。答えのわからない問題については、答えを「知ってる感じ」の強さを問う。ある質問の答えを、今は思い出せないが、知っていることを知っていることがある。あるいは、まったく知らないことを知っていることもある。事柄に関する記憶をモニターしているように思えるが、本当にモニターできていることを確かめるため、直後に多選択肢テストを行う。メタ認知能力があれば、FOKの強い問いは直後のテストで正解する確率が高くなり、弱い問いでは正解する確率が低くなると予想される。人では予想どおりの結果になることから、メタ認知能力を持っていると結論できる。

メタ認知の研究は言語によるコミュニケーションが可能な人でのみ実施できると考えられてきたが、適切な場面を設定すれば動物にも同様の機能をもつものがいることが最近の研究で明らかにされている。動物実験では、時々難しい問題が現れる記憶課題が使われる。従来の行動課題とは異なり、メタ記憶課題では、テストを受けるか回避するかを動物自身に選択させる。テストを受けて正解すると報酬を得られるが、間違った場合はペナルティーが与えられる。一方、テストを回避した場合は、少量の報酬がある確率で得られる。このようにした場合、動物がメタ認知能力をもっていると、難しい試行でテスト回避の選択が増加すると予想される。また、テスト回避のない強制テスト条件での正答率と、テスト回避を入れた自由選択条件での正答率とを比較すると、自由選択条件での正答率が高くなると予想される。この方法を用いて、サルや一部の鳥類はメタ認知能力を示すことが明らかにされている。

■研究の目的

メタ認知機能は自分の「こころ」の状態を認知する仕組みであり、これに直接関わる脳の仕組みを明らかにすることにより、人が自分の「こころ」を理解する手がかりが得られると考えられる。そこで、サルを用いて、メタ認知機能に関わる神経メカニズムを明らかにする。

■研究方法

眼球運動を利用した選択条件つき遅延位置合わせ課題を２頭のサルに学習させ、「テスト回避」条件を含む自由選択条件と、それを含まない強制選択条件での正答率の比較と「テスト回避」選択率の変化を、課題の難易度を変えて検討し、メタ認知を用いて課題を解決していることの確認を行った。CRTモニター中央に呈示される注視点を注視していると、その周辺に視覚刺激が0.5秒間呈示される。サルはその刺激呈示位置を記憶しておかなければならない。刺激呈示後、約５秒間の遅延期間に入る。この間も注視点の注視が必要である。遅延期間の終了後、モニターには赤、緑の刺激が呈示される。緑刺激を眼球運動により選択すると、記憶テストを受けなければならない。記憶テストでは、先に呈示された視覚刺激の呈示位置に眼球運動をすると報酬が得られる。間違えると20秒間の休み期間が挿入される。赤刺激を選択するとテスト回避となり、モニターに呈示された刺激に向けて眼球運動をすると30～50％の確率で報酬が得られる。課題の難易度は、遅延期間中に呈示される妨害刺激の数を３段階に変化させることで設定した。

■結果

４頭のサルのうち３頭で、難易度の増加に伴ってテスト回避率が増加した。また、強制テスト条件下での正答率に比べ、自由選択条件下のテストを受けたときの正答率が有意に高くなることが示された。この結果は、ヒト以外のサルや鳥類の一部もメタ認知能力を示すという先行研究の結果を支持する。同時に、これらのサルはこの課題の実行時にメタ認知機能を用いていることから、メタ認知機能に関わる神経基盤を明らかにする研究が可能であることを示している。ヒトを対象にした神経心理学研究や脳機能イメージング研究により、前頭連合野がメタ認知能力と関係のあることが示されている。今回の結果をもとに、これらの動物を用いてメタ認知機能に関わる前頭連合野の神経基盤を明らかにしていく計画である。

研究プロジェクト

現代における自己意識・他者意識の研究

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■ 問題意識

心理療法は、フロイトの『夢判断』が1900年に出版されたように、19世紀末から20世紀のはじめに成立し、西洋における自己意識や主体の成立を前提にしている。つまり自分で自分のことを見つめるという自己意識のために心理療法の対象となる神経症的な問題が引き起こされ、またそれを治療するための心理療法が可能となるという構造になっていた。心理療法が自主的な来談を前提にしているように、主体性があること、自己関係や自分の内面の成立ということは、心理療法にとって欠くべからざる条件であった。

それに対して、日本で心理療法を行おうとすると、自他の分離が曖昧であったり、人間主体だけではなくてモノに魂を認めたりするような前近代的な意識が残っているのを考慮する必要がある。それはよい意味では、箱庭療法の普及などにつながってきた。それと同時に、近年においては、解離症状や自傷・犯罪などの行動化する問題、さらには発達障害が増えてきており、それらにおいては、葛藤や自意識の問題というのが認められない。これはある意味で、心理療法というパラダイムそのものを揺るがすほどになっており、近代意識を飛び越えた「ポストモダンの意識」ということが言えると考えられる。

そこで本プロジェクトでは、一方で日本古来の意識やあり方を、主に『遠野物語』の新しい〈読み〉の検討を通じて研究し、他方で近代意識を飛び越えたような意識を、心理療法の実際やそこで生じてくるイメージ、さらには現代の文学作品から探ってきた。

■『遠野物語』の新しい〈読み〉

日本古来の意識がどのようなものであったかを知り、またそれがどのように新しいあり方の可能性に開かれているかを検討するためサブプロジェクトである「遠野物語の新しい〈読み〉」では、臨床心理学者と赤坂憲雄を中心とする民俗学者が一緒に『遠野物語』を読み、そこから日本古来のあり方や意識を読み取ってきた。

その中では、この世とあの世の境界があいまいであること、動物、山人などの異質の他者に出会う瞬間に境界と意識が成立すること、また古来の意識も、『遠野物語』のいくつかの物語の比較で歴史的な変遷がうかがわれることが明らかになってきた。研究会では、「山」、「ザシキワラシ」、「動物」などにテーマをしぼって、それぞれが自分の視点で解釈する研究会も何度か開かれた。たとえば「山」に関して、定点としての「石」と「小屋」に着目されるなどのように、臨床心理学者と民俗学者が意外に同じものに着目することが興味深く、相互の視点の交流によって、考え方を深めることができた。

これらの成果の一部は、既に『東北学研究』などに発表されたが、１つの論集としてまとめる方向で進んでいる。

■心理療法の新しい展開

現代の意識の特徴については、連携研究員の田中康裕や岩宮恵子が心理療法においてイメージや内面が扱われることが少なくなってきていることとして報告してきている。それは症状としては、日本人の代表的な神経症であった対人恐怖的な訴えが減少し、解離や発達障害的な様相を呈するものが増えてきていることに現れている。それに対して、心理療法においても、直接的な関わりが求められたり、セラピストとの関係を通じて境界を認識し、主体を確立するような方向が必要となってきたりしている。

■村上春樹と現代の意識

村上春樹の作品には、共同体や親と戦って主体を確立し、自分自身に責任を持つような近代意識をうち立てるという課題が意味を持っていず、既にバラバラになって生きているような人間が多く見られる。これはまさに近代意識を飛び越えた「ポストモダンの意識」のあり方を描いているように思われる。たとえば『スプートニクの恋人』に登場する、夏目漱石の『三四郎』の冒頭部分との比較を意識したエピソードが示しているように、近代意識の「禁止」、「個人の人格の連続性」、「葛藤」などがポストモダンの意識には認められず、瞬時につながっては離れるような意識になっている。

『１Ｑ８４』は、このような状況についての、物語として個人としての１つの生き方を示唆するものとなっていると考えられた。

参考文献

岩宮恵子『フツーの子の思春期』岩波書店、2009年。

河合俊雄『村上春樹の「物語」』新潮社、2011年。

研究プロジェクト

癒し空間の比較研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■「聖地・霊地」の特色とその心的メカニズム

「癒し空間」とは何か？　それは、人にある一定の「安らぎ」や「心地よさ」や「浄化」や「崇高さ」を感じさせる「空間・場所」である。それは、伝統的には「聖地・霊地」ないし「霊場」などと呼ばれてきた。

本研究プロジェクトでは、日本における政治・宗教・文化・観光の中心を成してきた平安京・京都に形成されてきた寺社や聖地などの「癒し空間」を、宗教学・資源学・生態学・民俗学・芸術学・衣食住文化研究・認知科学・認知心理学・臨床心理学などの諸種の方法を用いながら、総合的・多角的に研究を進め、世界各地の癒し空間との比較研究を試み、人に安らぎや崇高さを感じさせる場の特色とその心的メカニズムを突き止めることを企図している。「癒し空間」の比較研究は、伝統資源（リソース）の再活用や、環境の循環性や、地域の生物多様性や文化多様性などの観点から見ても極めて興味深い事例であり、そこから抽出された特性は現代の心の平安を再検討していく際に多大のサジェスチョンとヒントを与えてくれる。とすれば、本研究は、人類文明の“安心”“安全”“安定”という「平安」の条件や機能を再検証し、再活用する可能性を示唆できることになるだろう。

本研究プロジェクトでは、研究成果を、京都府や京都市、また諸地域との連携により、シンポジウムやセミナーやワークショップの開催により社会発信していく予定である。

■癒し空間のモデル化

本年度は、主として、京都・奈良および近畿諸地域の寺社や森や琵琶湖水辺、神奈川県および関東地方を中心にしたフィールド研究を行う。具体的には、奈良県吉野郡天川村坪ノ内に鎮座する天河大辨財天社と、神奈川県寒川町に鎮座する「相模国一ノ宮」の寒川神社と、上賀茂神社（賀茂別雷神社）や下鴨神社（賀茂御祖神社）や伏見稲荷大社や比叡山延暦寺や赤山禅院や法然院や本願寺などの京都・平安京の寺社を中心にフィールド研究し、それによって得られた癒し空間のモデル化を図る。その一部はすでに『月刊京都』などで発表している。また、癒し空間が持つ癒しの機能を臨床心理学的に探り、さらに、仏像や樹木や岩などがもたらす心理効果を実験心理学的な手法で探求することも将来的な視野に入れている。

■「生態智」の研究

「癒し空間」の研究は、聖なる場所での人々の「身体知」や、そこに集蔵された「生態智」の研究と密接につながっている。本プロジェクトでは、「生態智(Ecosophia,ecological wisdom)」を「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの知恵」であると定義し、それはパワースポットの源流である聖地や癒し空間や古代からのさまざまな生活文化のワザの中に保持されてきていると考えている。

伝統的に「聖地」と呼ばれてきた場所は、「聖なるモノの示現するヌミノーゼ的な体験が引き起こされる場所」であるが、そこには「生態智」と呼ぶほかない知恵と力が宿っているがゆえに、そこで長らく祈りや祭りや籠りや参拝や神事やイニシエーションなどの儀礼や修行（瞑想・滝行・山岳跋渉等）が行われてきた。

■21世紀の「霊性のコモンズ」

そのような場所は、太古の記憶を場所の記憶として蔵した聖なるものの出現地にして、魂を異界へと飛ばし、つなぎ、浄化し、活性化するタマフリ・タマシヅメの力を持つ特別の力と価値のある場所とされた。そこは、人間にとって根源的ないのちと美と聖性に関わる宇宙的調和と神話的時間を感じとる場処でもあった。したがって、聖地は、「性地（エロス空間）にして政地（政治空間）」でもあった。すなわち、生殖を含む生命力を喚起し、活性化するのみならず、人々の念や思いや信仰を集め、情報とエネルギーの集積回路となる「性地」としての特性があるために、そこは政治的な統治や支配にとっても非常に重要な場所、すなわち「政地」となってきたのである。最澄や空海が開いた比叡山や高野山はそのような総合的な神聖空間であったといえる。

本研究プロジェクトでは、そのような「生態智」を深く宿す「聖地」を21世紀の「霊性のコモンズ（公共財）」として捉え直し、それらを伝統文化の再布置化や地域文化再興にトランスレイトする方向性を企図している。

参考文献

河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新書、朝日新聞出版、2008年。

鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版、2008年。

鎌田東二編『平安京のコスモロジー ―― 千年持続首都の秘密』創元社、2010年。

鎌田東二編『遠野物語と源氏物語 ―― 物語の発生する場所とこころ』創元社、2011年。

鎌田東二編『日本の聖地文化 ―― 寒川神社と相模国の古社』創元社、2012年。

研究プロジェクト

進化と文化とこころ：生物的視点と社会的視点からこころを探る

平石　界（こころの未来研究センター助教）

■目的

古来「人間とは何か」そして「人間のこころとは何か」という問いを追求する営みは、宗教、哲学、文学、政治学、経済学、社会学、心理学、人類学、そして生物学や脳神経科学など、多層的に厚みをもって行われてきた。本研究プロジェクトは、特に「進化」と「文化」という切り口から迫るアプローチを取り上げ、それぞれのアプローチを専門とする研究者間の交流とコミュニケーションを促進することを目的としている。

■プロジェクトの第一の軸:共同講義

本研究プロジェクトは３つの軸によって推進されている。第一の軸は、メンバーらによる共同講義である。2010年度は、京都大学の全学共通科目である「こころの科学入門Ⅰ」で、メンバーの平石と内田に吉川左紀子こころの未来研究センター長を加えた３名で、「理論」「感情」「他者理解」「対人関係と自己」「言語」という共通テーマにたいして、進化心理学、文化心理学、認知心理学の立場から講義を行い、さらに講師と受講生によるディスカッションを行った。

また、より専門的な内容を扱う講義として、総合人間学部の学部特殊講義「こころの科学」も開講した。夏学期は「進化」、冬学期は「文化」を中心テーマに、プロジェクトメンバー全員が参加して講義とディスカッションを行った。2010年度冬学期は、こころの未来研究センター客員准教授であるベス・モーリング氏（米国デラウェア大学・文化心理学）にも担当していただいた。

■プロジェクトの第二の軸:ワークショップ

第二の軸はワークショップの開催である。「第１回進化と文化とこころワークショップ」（2010年８月９日）では、竹澤正哲氏（上智大学）による「制度アプローチから考える文化の維持」と、鳥山理恵氏（トロント大学）による「文化伝達：模倣から社会学習まで」という２つの話題提供を中心に議論した。竹澤氏は、米国南部における「名誉の文化」の例を挙げつつ、文化が特定の社会生態学的条件における合理的な“制度”として説明できることを指摘した（ニスベットとコーエン、2009）。しかし文化は、環境が変化した後も“非合理的”に維持されることがある。こうした文化の“慣性”を理解するには、それが伝達されるプロセスを明らかにする必要がある。鳥山氏は、発達心理学の研究を紹介しつつ、文化伝達において、真似する者（子ども）が、対象者（親など）の行為の意図を理解した上で、まったく同じ行動を取る「真の模倣」が重要であることを指摘した。真の模倣によって文化的知識が累積されることが、チンパンジーなどの文化と、ヒトの文化を大きく隔てるものと考えられる。しかし「真の模倣」は「非合理的な文化の維持」という問題を解決するものではなく、今後の議論がまだ必要とされる。

「第２回進化と文化とこころワークショップ」（2011年３月24日）は、文化の歴史的変化パターンを検証する“文化系統学”を主テーマに、三中信宏氏（農業環境技術研究所／東京大学、生物統計学）による講演「文化系統学と系統樹思考」ならびに、2011年に出版予定の『文化系統学への招待』（中尾央・三中信宏編著、勁草書房）の草稿講読会を行った。現存するさまざまな文化の類似性を比較することで、どの文化とどの文化が歴史的に近接するか、文化の歴史的変遷／過去を再構築するのが文化系統学である。ワークショップでは、こうした手法が文化心理学によるアプローチとどのような親和性を持ち、さらにどのような研究へと発展する可能性があるのか、議論が行われた。

第２回進化と文化とこころワークショップ

■プロジェクトの第三の軸：講演会の開催

第三の軸は、研究会・講演会の開催である。2010年９月６日には森島陽介氏（チューリヒ大学）を迎え、見知らぬ他者への利他性の個人差と脳活動の関係についての研究を紹介していただいた。11月９日には山田克宜氏（大阪大学）に、社会の平均所得が上昇しても人々の幸福感は必ずしも上昇しないというイースターリンのパラドクスについて、幸福感は他者との比較によって決まるとする立場からの研究を紹介していただいた。

■今後の展望

本研究プロジェクトは2010年度に正式スタートしたが、それ以前から平石と内田は「進化と文化とこころ」のコミュニケーションを図ってきた。今後も継続して互いの領域の最新の知見をぶつけ合う場を作ることで、「こころ」の多層的理解への道を探っていきたい。

こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

■こころの科学集中レクチャー

2011年３月３日からの３日間、2010年度のこころの科学集中レクチャーが行われた。前年度に続き、２回目の集中レクチャーである。この教育プロジェクトは、文化心理学の北山忍先生（ミシガン大学）にコーディネータをお願いし、「こころのはたらきのもつ不思議さ、おもしろさをより深く理解すること」を目的として実施している。学部１年生からポスドクまで参加資格に制約はないが、受講希望者は、500字ほどの受講理由をつけて申し込むことになっている。講師同士のディスカッションや、講師と受講生のディスカッションの時間がふんだんにあるので、「意欲的で積極的な受講生」の参加を望んでいるためである。

■「こころの謎：文化、社会、感情、脳の密接な関係」

2010年度の集中レクチャーは、前年度のテーマを継続して「こころの謎：文化、社会、感情、脳の密接な関係」。北山先生のほか、認知科学の下條信輔先生（カリフォルニア工科大学）、神経科学の入來篤史先生（理化学研究所）を講師に迎えて実施した。受講生は、48名。レクチャーのスケジュールは３日間共通しており、午前中は10時から90分の講義と60分のディスカッション、午後は２時15分から90分の講義と60分のディスカッションである。昼食時にも議論が続くことを想定して、昼食時間もゆったりとってある。

１日目の講師は下條信輔先生、２日目の講師は入來篤史先生、３日目の講師は北山忍先生。３日間とも、午前と午後の２回のレクチャーに講師全員が出席し、レクチャー後のディスカッションにも参加する。世界をリードする先端の研究者による講義と、それに続く講師陣のやりとりは、受講生にとって、こころの先端研究の面白さを実感する貴重な３日間となった。以下は、集中レクチャー終了後の、受講生の感想からの抜粋である。

「大学で受ける講義とはまったく違うスタイルで、知的興味を非常に刺激される内容でした。先生がたがお互いの研究内容について激しい議論をされるのを直に体験できたことは私にとって非常に貴重なことでした」

「それぞれバックグラウンドの異なる３人の先生がたによる意見交換は、今後、自身がある心理学的現象を解釈する際に多角的な考え方ができるようになるのに非常に有益だった」

「贅沢なセミナーでした。知識の伝達だけでなく、研究者としての大きな見方を聞くことができて良かったです。先生がたの知識の豊富さと研究に対する姿勢に驚かされました。ひとつの質問に対して、100個くらいの答えが返ってきてる感じでした」

■講義の概要

各講師による講義の概要は下記のとおりである。

- **講義１（下條信輔先生）「意識の主観経験と行動：『クオリア』を巡って」**

心理物理学、神経科学における最近の知見や現象を足がかりに、クオリア問題が少なくとも部分的には擬制問題であり、解決不能な難問に見えた仕組みそのものも、生物学的／神経科学的／言語学的制約条件から了解可能であることを示す。

- **講義2（下條信輔先生）「意思決定のメカニズム～潜在と顕在、受動と能動」**

講義の前半では、選好意思決定がそれに先立つ潜在的な行動／神経過程によって決定されていることを示す。後半では、脳内の神経活動の因果関係を調べた知見に基づき「外からの感覚刺激で直接決定されていれば受動的、脳の内的要因で決定されていれば能動的」という常識的な考えが神経科学の立場からは必ずしも支持され得ないことを示す。

- **講義3（入來篤史先生）「創造性の神経生物学的起源」**

創造的な芸術作品では、時間・空間・意味・価値などの無数の「次元」が渾然一体と溶け合いながら魅力を放って、観る人の心を惹きつける。この創造的世界が、脳の中でどのように出現するのかを、宇宙・物質・生命・精神の起源と進化という、より大きな文脈の中で俯瞰しながら議論を進める。

- **講義4（入來篤史先生）「人間知性の進化の神経生物学」**

身体の構造や運動に立脚した象徴概念形成、推論／論理思考などの機能や、これらの機能にもとづいて他主体の意図や主体間相互関係の理解を担う脳内機構などについて、研究事例を紹介しながら、その神経生物学的メカニズムについて考察する。

- **講義5（北山忍先生）「進化、文化、心」**

進化と文化という大きな時間軸のもとにどのように人間の脳が変化し、いわゆる「文明的生活」が可能になっているのかを考察するための理論的枠組みを提示し、それを関連する実証データで検証する。

- **講義6（北山忍先生）「脳の可塑性と社会性」**

人は、文化という外的環境に適応（しようと）し、その過程で心理的情報処理システムも、それに介在する脳システムも変容すると考えられる。近年の文化神経科学のデータを中心にこの可能性の妥当性を検討し、脳は当該の文化の影響を受け可塑的に変容し、認知・感情・動機づけといった様々な心理過程を規定することを示す。